

テーマ「新スタイル時代に向けた、富良野市の地域戦略を考える。」 参加者:次世代を担う市民、事業者、富良野市職員30名

趣旨

富良野市において、構造変化に対応する新スタイルへの移行を目指し、未来を創るため市民、行政、経済団体との連携により地域課題を解決し、新たな時代に対応したまちづくりの方向性、方策等を検討を行うとともに、次世代を担う人材の育成とネットワークづくりを目指す。



プログラム

情報提供

■「民間主導のまち育て・再生実践マニュアル」概要版

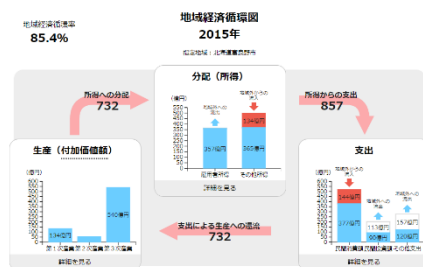
民間主導のまちづくり方策を検討し、進めていくための実践的マニュアルの紹介(令和3年3月日本商工会議所作成)



■「データで見る富良野市の経済」

リーサス等の情報を活用し分析した富良野市の地域経済の特徴と地域経済循環の状況を説明

具体的な提案の一つとして、北海道における「リビング・ラボ」(地域経済創出拠点)的位置付けを提案



基調講演

和歌山大学副学長・教授 足立基浩氏

演題:「構造変化に応じたこれからのまちづくりに大切なことについて」

- ・これからのまちづくりに大切なことは、まずは構造変化を知ること。
- ・2023以降、観光客は増加見込み、E(電子)コマース市場が拡大する。
- ・今後のトレンドとして、エンタメ、観光宿泊、情報通信、学び、農業等の分野を取り入れることが重要
- ・今後の先取り構造変化は、デジタル、まちづくり組織(都市再生推進法人)及び土地(低未利用地不動産の積極的活用)の三つのトランスフォーメーション
- ・ローカルファーストによる地域経済循環の推進
- ・まちづくりは「エリアマネジメント」方式で(ローカル地域を丁寧に区割りして活性化を図る。)
- ・次世代人口を育てる。(高校生、大学生が主体として参加)
- ・地域の魅力と課題を科学的に再確認して、何が足りないか徹底的に分析する。
- ・エリアマネジメントで計画的に民間主導のまちづくりを行う。

グループ討議

■ テーマ1「今後、まちを取り巻く環境はどのように変わるか」

主な意見

<マイナス要因>

- ・イメージと現実のギャップにより期待値が下がる。
- ・知名度、ブランド力がますます低下していく。観光客の減少
- ・人口流出、少子高齢化の進行により、跡継ぎ減とコミュニティ力が低下する。
- ・人口減によるまちの空洞化、空き地の増加、マーケットの縮小
- ・外国資本の流入
- ・若い世代の都市部、地方拠点都市への流出が進展
- ・生活基盤(病院、商業施設の減)の悪化、空き家の増加、学校の減、自然環境にも影響

<プラス要因>

- ・環境資源の価値が高まる。農業への価値が高まる。
- ・スローライフを求める人が増える。
- ・リモートワーク、5Gの普及、ワーケーション需要の高まりにより、移住促進のチャンスが生まれる。
- ・スキーリゾートとしての知名度がアップ

■ テーマ2「そのような中、まちを持続させていくために何を見直し、どのように行動していくか」

主な意見

- ・行政と民間との連携、協働を高める。
- ・シビックプライドを高める。
- ・共創の実践
- ・交流人口を増やす。住民一人一人、訪問者がまちのセールスマンになる。
- ・日常的に楽しめるイベントを増やす。
- ・お互いの文化を知るコミュニケーションの場を設ける。
- ・新しいアイデアが生まれるような交流型イベントを増やす。
- ・地域内で異業種のコラボが生まれるような仕掛け作りを行う。
- ・暮らすように旅するコンテンツを増やす。
- ・過去からのバトンをつなぎ、新たな価値にアップデートしていくような動きを作る。
- ・子育てのための環境整備(ハード・ソフト)により、子育て世代の流入を促進する。
- ・老若男女、様々な世代の活躍の場を作る。
- ・雇用の促進をまちぐるみで実施
- ・地域通貨、市民お助けポイントの導入検討
- ・空き家・空き店舗活用による起業支援
- ・自然・文化を生かした新たな魅力づくりとSDGsに関わる事業の推進
- ・農業のIT化を支援する。
- ・サステナブルに重点を置いた市の特区の検討
- ・地域人材、地域資源等を活用した地域の学びの学校の創設
- ・市役所を多くの人が集まりやすい環境にし、地域の拠点にする。

令和3年11月15日(月)13:00～17:00 佐久平交流センター

テーマ「チーム佐久だからこそ可能な新たな時代に対応したまちづくりを考える。」

参加者:次世代を担う市内事業者、佐久市職員及び佐久商工会議所職員 38名

趣旨

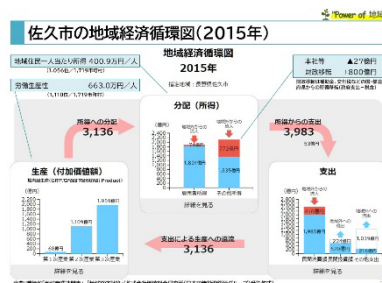
佐久市において、
地域経済の好循環の創出と持続可能なまちづくりを進めるために、
事業者、経済団体、行政とが連携し、
一丸となって地域課題を解決し、
連携による新たな方策の方向性を検討する。



プログラム

情報提供

- 「民間主導のまち育て・再生実践マニュアル」概要版
- 「データで見る佐久市の経済」
地域経済の特徴を踏まえた持続可能性を高めるための戦略が必要(観光の産業化に官民で取り組む地域マネジメント)



基調講演2

(株)商い創造研究所代表取締役 松本大地氏

演題:「新たな社会環境の変化の中における地域一丸となったまちづくりに必要なこと」

- ・コロナ前から急変していること(AIの進歩、5Gサービス、情報通信ソースはSNS、時間ソリューションで処分時間獲得、サブスクリプション)
- ・コロナを体験した日本の商業施設は、同一化した箱物モール離れが加速、買い物目的からライフスタイル向上目的に変化、SC開発が鈍化し運営力勝負になり、公民連携が強まる。
- ・コロナ災禍は大きな転機であり、「便利で快適な社会」から「生きるに値する社会」に変わる始まりになる。
- ・これを機に地域生活を大切に暮らす人が増え、地域を心地よい空間にし、公共空間との融合がうまくできるかが重要
- ・地方都市は、新しい時代の価値観に対しどの方向を目指すのか、その要となる新たな街の魅力をどう作るのか、時間を費やすに値する価値をどう作るのかが課題
- ・街なかりビング計画で交流人口を増やし、官民連携による街の居場所を作り、SDGsの取り組みを導入しする。
- ・ローカルファーストで、街づくりデベロッパーとしてビジネスリーダーが先頭に立つ仕掛け作りが必要

基調講演1 地方自治体公民連携研究財団代表理事 藏田幸三氏

演題「新たな時代における官民連携のまちづくりを進めるために」

- ・新しい時代に求められる要素としては、現状把握(情報・データを収集・活用する)、選択(夢と現状のギャップの解決方法を見つける)、決定・行動(スピーディーな決定、行動、臨機応変的対応)が重要
- ・官民連携まちづくりのキーワードは、地域独自の課題を発見し解決すること。公民にかかわらずまちの空間資源を使いこなすこと。人間中心の視点で居心地良い空間をつくること
- ・手法としては、官民連携プラットフォーム、都市再生推進法人による公共空間活用、エリアマネジメント、まちづくりファンド等が有効

グループ討議

■ テーマ1「今後、まちを取り巻く環境はどのように変わるか」

主な意見

<マイナス要因>

- ・少子高齢化、人口減少の一層の進展
- ・地域コミュニティが希薄になる。交流の機会の減少
- ・消費の減少、偏りが発生
- ・街なかの治安の悪化
- ・佐久平への一極集中が加速、地域間格差が生まれる。
- ・既存商店街の衰退とナショナルチェーン店の進出拡大
- ・空き家・空き地の増大
- ・農業者の担い手不足の進展
- ・後継者不足による商店街の消滅
- ・市民のまちづくりへの関心が薄れていく。
- ・古くからの文化・伝統芸能がなくなっていく。
- ・子育て世代の転出
- ・佐久のまちとしてのイメージが曖昧になり、ブランド力が低下する。
- ・移住需要が、軽井沢町、御代田町にとられる。

<プラス要因>

- ・幹線道路の整備、公共交通機関の充実による交流人口の増加
- ・生活様式の変化、コロナ等により、田舎暮らしを求めて移住者が増える。
- ・大手企業の地方移転が進む。
- ・テレワーク拠点の整備
- ・佐久平周辺開発による税収の増

■ テーマ2「環境の変化を踏まえ、まちを持続・発展させていくために、地域一丸となって取り組むべきことは何か」

主な意見

- ・佐久平への一極集中の流れを変える。各地域において歩いて楽しいまちづくりを進め、地域の個性を際立たせ、地域ごとの魅力を向上させる。
- ・地域ごとにコンパクトシティ化を進める。
- ・公共空間(道路等)の活用、規制緩和、自転車専用道の整備
- ・雇用の機会の総出、企業誘致、副業の推進
- ・多種多様な働き方を受け入れる環境づくり
- ・移住者を積極的に受け入れる環境づくり(ハード・ソフト)、移住者と住民の交流機会を増やす。
- ・若者が戻ってくるまちづくりを進める。
- ・新規就農者参入のための規制緩和、休耕地の活用
- ・官民連携による子育て支援、子育てしやすいまちづくりを進める。(屋内外における子どもの遊び場、居場所づくり、学童、夜間時保育等)
- ・地域ぐるみで保育や生活相談を推進、商店街が子育て世代を支援
- ・教育力の強化、共助による教育支援(街なか寺小屋等)、大学や専門学校、中高一貫校の誘致
- ・健康に良いまちづくり(街なかウォーキングコース、ランニングコース等の整備)、健康長寿のまちづくり(身近なエリアですべてが揃う)
- ・芸術・音楽関連のイベントを増やす。(トリエンナーレ、音楽祭等)
- ・絵本によるまちづくり(絵本古本市、絵本づくりイベント、絵本図書館等)
- ・佐久の自然、景観、文化等の魅力をメディアを使いもっと発信する。(PR動画、CMの作成) 佐久のファンを増やす。市全域にWiFiを整備
- ・魅力ある田舎暮らしができるまちとしてPR
- ・多くの人が集まり、交流の拠点となる公園の整備(バーベキュー、ドッグラン、キャンプ等の施設も整備)
- ・地産地消によるブランド化の推進、日本一のマルシェ開催
- ・地域内移動手段の整備(カー・サイクルシェアリング、登録制タクシー等)
- ・現在の武道館を活用し、飲食、宿泊の拠点にする。

テーマ「まちの育て・歩いて楽しいまちづくりワークショップ」

参加者:次世代を担う市内事業者(商店会関係) 18名

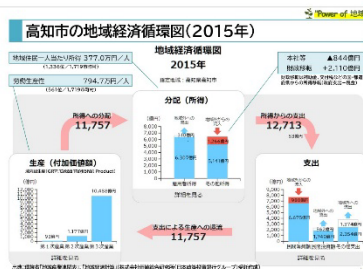
趣旨

高知市の持続可能なまちづくりににおいて、基盤となり大切な役割を果たす商店街の活性化とウォーカブルシティの実現を図るため、地域の課題、新たなニーズの発見、共感や歩いて楽しいまちづくりのアイデアの創出等を行うとともに、担い手として新たな人材の育成を目指す。

プログラム

情報提供

- ローカルファーストの価値観について
ローカルファースト財団理事長 亀井信幸
- 「民間主導のまち育て・再生実践マニュアル」概要版
- 「データで見る高知市の経済」
第3次産業が自立的かつ内在的に発展している構造を維持・強化していくための取り組みが必要



基調講演1

和歌山大学副学長・教授 足立基浩氏

演題「構造変化に対応したこれからのまちづくりに大切なことについて」

- ・ホストコロナにおける構造変化(デジタル、まちづくり組織、土地のトランスフォーメーション)とローカルファーストによる地域経済循環をとらえる。
- ・「愛着」、「調査」、「リスク管理」により、まちづくりを科学的に解明する。
- ・エリアマネジメントで計画的に民間主導のまちづくりを行う。(エリアマネジメント会社を作り、建物の一括管理やマーケティングも実施)
- ・高知市は、そもそも観光、農林業が強く、産業のあるまち。新たな発想で市街地再生を行う。「近隣観光客の取り込み」と「地産地消」を基本に、「住、芸術」などもキーワードになりえる。
- ・「変化」を意識しつつ、変わらぬブランドを育てていく。

基調講演2

全国商店街振興組合連合会理事長 阿部眞一氏

演題:「まちづくりの実践～ローカルファーストなまちづくり」

- ・佐久市において、新幹線や幹線道路の整備等が進み、佐久平駅周辺にナショナルチェーンの大型店が複数出店、市全体の商業売上は大幅に上がったが、それは大型店のみで既存商店街は大きな打撃を受けた。
- ・ここから、若者中心の商店街振興組合の様々な挑戦が始まる。
- ・「ただイベントをやり続ければ商店街は活性化する。」はウソ、イベントの目的は、販売促進と社会貢献を達成すること
- ・商店街活性化のためには、右手にソロバン、左手にコミュニティ。コミュニティ事業を行えば、定住人口の確保・増加につながり、活性化する。
- ・空き店舗対策事業の柱は、①事業の洗い出し②現状把握と予測③大家さんの理解・協力④各店舗の商いの見直し
- ・各事業がうまく進まない中、新たな試みとして、民間主導により、地域の歴史・文化・経済・社会資源等を自分たちで学び、未来希望図(活性化基本構想)を策定した。
- ・本構想にあわせ、これからの商店街に必要なアイテムを考え、これらが充実したソフトやハード整備を行うコンセプトプランを作成するとともに、推進主体としてのまちづくり会社を設立した。
- ・商店街は生活街であり、生活を中心としたローカルファーストなまちづくりを進めることが必要



グループ討議

■ テーマ1「新たな時代における持続可能で歩いて楽しいまちづくりとは何か」

主な意見

上記まちづくりを進め上で、必要な要素とは、

- ・全国チェーンにないものに価値があり、来街者の興味を引く。
- ・顧客ニーズに合う商品が並ぶ個店の魅力がある。
- ・観光客にとっても楽しい店や空間がある。
- ・手に触れる体験ができる。
- ・回遊性アップのためのキャンペーンが常時行われている。
- ・地域にしかない食がある。
- ・子育てをサポートするような空間がある。
- ・住民のための文化・エンタメ施設がある。
- ・お年寄りや子どもが安心して休憩できるちょっとした空間を設ける。
- ・地域との連携やコミュニティが作れる場所、環境を設ける。
- ・地元の学生を巻き込んだイベントの実施やチャレンジショップがある。
- ・人と人とのつながりを大事にし、治安を守る。
- ・カオスを楽しんでもらう
- ・ハード面でのバリアフリーが整っていること。

■ テーマ2「まちづくりにおける商店街の役割と持続的に発展していく商店街を形成するためにやるべきことは何か」

主な意見

- ・人と人とを繋ぐオンリーワンの存在、交流拠点を目指す。
- ・高知らしさ、オリジナリティの発揮を迫る。
- ・スマホアプリ、IOTを活用したサービスの提供
- ・商店街全体でInstagram等SNSによる多様な情報発信を積極的に行う。
- ・オリジナルサイトやデジタルサイネージの整備
- ・デジタル、アナログのマップ作成
- ・地域の文化・歴史を積極的に発信する。歴史を学べる環境づくり
- ・よさこい文化をしっかりと継承し、それを生業にしていける。
- ・店主が地域の文化・歴史をしっかりと語る。
- ・観光を地域の宝として再認識すること。
- ・アート・エンタメ等の楽しい空間・施設整備
- ・女性や高齢者の憩いの場となる。
- ・楽しさを演出する土曜夜市などのイベントを増やす。
- ・チャレンジショップ等が出店しやすい仕組みづくり
- ・Iターン、Uターンの人たちの受け入れを積極的に行う。
- ・個々の事業を継承できる後継者の育成やリーダーを育てる。
- ・地元の魅力ある個店(特に物販)を継続させていくことが必要
- ・アイドルタイムにクローズしない店舗や老舗店舗への支援
- ・空き店舗を出さない、置いてけぼりを出さない。
- ・商店街への公共交通によるアクセスの整備
- ・周辺施設との連携強化(特に、防災情報、行政情報)
- ・独自性をいかに発揮していくかについて、常に考え話し合い、実践していける体制づくりが必要、組合の組織強化